



# 戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「登場人物編」その6

—近世（江戸時代）前編—

原田 広（非文字資料研究センター 研究協力者）

## はじめに

本稿連載「登場人物編」6回目として、国策紙芝居に描かれた「近世（江戸時代）」の人物を取り上げる。対象は、紙芝居の主人公となった人物のうち、徳川家康、大石内蔵助、上杉鷹山、濱口梧陵、大原幽学、二宮尊徳、伊能忠敬、間宮林蔵、高田屋嘉兵衛、山田長政、松尾芭蕉、小林一茶、本居宣長、頼山陽、宮本武蔵、清水次郎長といった面々である。これらの名前は、国策紙芝居が流通した時代から約80年を経た現在においても、日本人の脳裏に一定の共通イメージを喚起する固有名詞群であるといえよう。一般的によく知られている（いわば既視感の高い）ラインアップであるだけに、取り上げ方によっては平凡な偉人紹介に終わりがかねない難しさを伴う人物群でもある。

これまでの人物編連載「現代（昭和前期）」編、「近代（明治・大正）」編においては、登場人物に仮託された国策性（戦時プロパガンダ）を析出することが比較的容易であった。その点に主眼を置いた分析によって“国策紙芝居の国策紙芝居たる由縁”を描き出すことが可能であったと思われるのだが、「近世（江戸時代）」の登場人物についても、同様の方法で臨むことはできるだろうか。「近世（江戸時代）」は、王政復古から原爆投下に至る近代天皇制国家に先立つ長い歴史がある。また下剋上の戦乱の終息・社会文化の発展に伴って登場する人物も多岐の領域にわたっている（一幕府政権の頂点から俳諧芸術を確立した文人まで。また自国（やまと）の歴史研究に生涯を捧げた学者から大航海時代後の海洋国として通商・探索に赴いた人物まで。そして近世社会の社会事業への貢献者から幕末明治の裏面を生きたアウトロー、近代移行期の庶民生活を瞥見させる講談ものが伝える人物まで）。そのため、前二編「現代（昭和前期）」「近代（明治・大正）」とは異なり、「近世（江戸時代）」の登場人物を通して近代的な「国策」性を抽出することは難しいと考えられる。

これら多様な人物配置の意義を問うことは、国策紙芝居にとって270年に及ぶ長い「近世（江戸時代）」とは何であったかを問うことと近似であるようにみえる。近代天皇制国家77年間の末期に、これら近世の人物は如何なる観点から選択され、どのように回顧されたのか—そのような接近が必要であると考えられる。そこで、近

代以降にまで継承されてきた著名な人物伝記—それぞれの物語の原点と伝承性に着目し、（個々の人物ではなく）以下のような共通項（主題）に沿って作品と人物を紹介し、それぞれの共通項（主題）が国策紙芝居の世界に招聘されるに至った意味を探るという方法を探ることとしたい。

- (1) 幕藩政権への両義的態度：徳川家康、大石内蔵助、上杉鷹山
- (2) 社会強化、事業家、名望家：濱口梧陵、大原幽学、二宮尊徳
- (3) 海洋国の自意識若しくは北守南進の原点：伊能忠敬、間宮林蔵、高田屋嘉兵衛、山田長政等
- (4) 講談への親和：宮本武蔵、清水次郎長、大岡越前
- (5) 近世文人・学者（思想家）への讃仰とナショナリティ：本居宣長、頼山陽、高山彦九郎、松尾芭蕉、小林一茶

なお文中、『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉強出版、2018.2）は『国策』と略し、その作品解題を一部引用させていただく。脚本の引用部はイタリックで表記する。年号は、元号と西暦を併記する。また今号も、誌面の都合で前編（1）～（2）、後編（3）～（5）に分割して掲載することとする。

## 1. 幕藩政権への両義的態度：徳川家康、大石内蔵助、上杉鷹山

「近世（江戸時代）」の人物として最初に取り上げるのは、徳川幕府の初代将軍、赤穂藩の筆頭家老、米沢藩の9代藩主の3人である。それぞれ組織機構のトップにあって、幕藩体制の価値観と藩政の舵取りを担う、そして誰もが知っている人物として明治以降も記憶されてきた。

### (1) 関連作品

●家康と塵紙／神谷喬太郎脚本；羽室邦彦繪畫、日本教育畫劇、1943.07.31

【あらすじ】元和元（1615）年の秋半ば、駿府城で大御所政治を営む晩年の家康。その年の5月大坂夏の陣で豊臣氏を滅ぼし「万代不易」の地位を獲得した徳川家の行く末を思う家康は、或る日3人の小姓に己を映す鏡に託して、「腕を磨くとともに心身を養うこと」の大切さを説く。陽が陰り「くしゃみ」をした家康の手から、風に煽られて舞い上がった塵紙を追う滑稽な姿に小

姓たちは思わず笑う。これに対して、「作者の苦勞を思い」「たかか塵紙一枚と吝嗇を笑う不心得」を諷める家康に、小姓たちは「やはり偉いお方じゃ」と今更のように感じ入る（『国策』 解題 p. 169／原田）。



図1 『家康と塵紙』 10 景

●忠臣蔵。前篇、後篇／鈴木景山脚本；西正世志繪畫。日本教育畫劇，1944. 06. 30

【あらすじ】前篇：ご存じ「忠臣蔵」の物語。「解説」には「大体の事柄は、誰でも知つてゐる事であるから、それを前提として構成されてゐる」とある。やつれた印象のある浅野内匠頭の苦惱から物語はスタート。浅野—吉良のもめごと（江戸城・松の廊下）から内匠頭の自裁、赤穂への報せ、家臣たちの会議、大石主税の進言、そして大石内蔵助が赤穂城を去り、仇討ちを誓う場面までを前篇として描く。後篇：討ち入り同志による吉良邸搜索から、大石の討ち入り覚悟、討ち入り当日までを描く。取り立てて紙芝居独自のストーリーを展開・編成しているわけではない（『国策』 解題 p. 214～215／大串）。



図2 『忠臣蔵』前篇 4 景



図3 『忠臣蔵』後篇 19 景

●上杉鷹山公／齋藤潔編；京極佳夕畫。紙芝居刊行會，1942. 10. 05

【あらすじ】上杉鷹山（治憲）は、日向高鍋から米沢藩上杉家の養子となった。治憲が名君となった背景には、その素質もさることながら、老臣三好重道が若い頃から教育係として君主の道を説いていたこともある。領主となった治憲は窮乏する米沢藩を再建すべく、儉約と興産を主とする改革を断行、自らも節儉を実践した。守旧派はこれを妨害したが、治憲は全家臣の意見を聴取して守旧派を一掃する。漆、桑、楮の栽培を奨励、農耕開発のための水利事業、資金援助等の施策に加え、武士も農業に従事させ、さらに自ら開墾に赴いて激励し、大きな成果を挙げた。飢饉に備えた食糧備蓄も実施した。また、領内を五人組・十人組で組織化し、相互扶助を実現した。これらの政策は、天明3（1783）年の飢饉において効果が示される。現在有名な米沢織は、治憲が開発させたもの。治憲が臨終の際には、昔助けた双子の百姓娘が三年かけて作った布団が献上されるなど、下々に慕われた名君であった（『国策』 解題 p. 127／森山）。

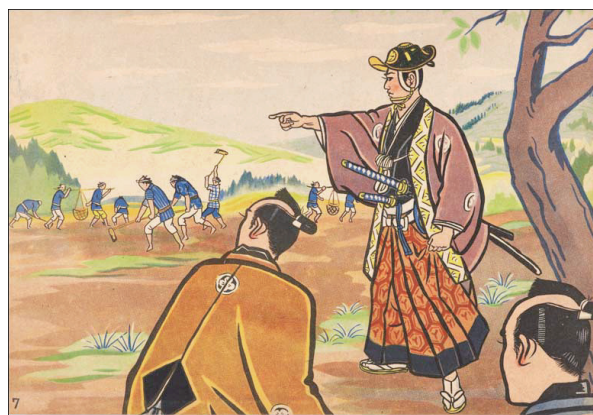


図4 『上杉鷹山公』 7 景





## (2) 幕藩政権への両義的態度

### ・江戸幕府の初代征夷大將軍・徳川家康 (1542 年 1 月 31 日-1616 年 6 月 1 日)

紙芝居『家康と塵紙』1943. 07. 31 は、家康晩年の茫洋たる姿に題材を借りた「儉約奨励」の物語である。作品の出版年月 (7 月!) は、支那事変 3 周年の 1940 年 7 月に出版された「奢侈品等製造販売制限規則」(いわゆる「七・七禁令」) に因むものであるといつてよい。この一年前には、物価のみならず、運送費・保管料・損害保険料・賃貸料などほとんどすべての価格を 1939 年 9 月 18 日現在水準に凍結・値上げを禁止する勅令「価格等統制令」——いわゆる「九・一八停止 (ストップ) 令」が出されており、国家総動員法第 19 条に基づいて戦時下社会生活の統制が強化されていた。これに呼応して贅沢や過飾を戒める国民精神総動員運動の標語——「贅沢は敵だ (国民精神総動員本部/1940)」「パーマネントはやめませう (国民精神総動員本部/1940)」「欲しがりません勝つまでは (大政翼賛会・毎日・朝日・読売/1942)」が盛んにつくられた。こうした記念日に合わせるような作品制作は、その他の国策紙芝居にも少なからずみられる。

戦時下紙芝居の中で徳川家康が取り上げられる場合、江戸幕府を開いた家康の公的事跡ではなく、周辺ので末な挿話の類に限定されている。本作品でも家康は、幕藩国家の儒教的価値観を矮小化した处世倫理を体现する好々爺物語の主人公として登場させられている (『国策』解題 p. 169/原田)。すでに昭和前期の国体明徴運動のもとで、「(頼朝以来の武家政権は) 我が国体に反する政治の変態」(文部省教学局『国体の本義』) と断じられていたことはよく知られているが、本作品では王権に敵対的な近世武権のイメージは拭い去られ、近世における將軍—藩主—家臣というモラル序列の痕跡すら描かれる余地もない。武家政権に対する突き放したような距離感、近代国家における逆説的禁忌ともなっているようか。

### ・播磨赤穂藩の筆頭家老・大石内蔵助 (1659 年-1703 年 3 月 20 日)

よく知られているように、『忠臣蔵』は、史実としての「赤穂事件」からストレートに生み出された物語ではなく、約半世紀後の 1748 (寛延元) 年に初演され大人気を博した竹田出雲ほかの浄瑠璃・歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』を通して定着したものである。「四十七士の討ち入りは義挙か暴挙か」——それを公に否定すれば封建制の精神的柱である「忠孝」が否定され、それを公に肯定すれば封建制度の「法秩序」が否定されるというジレンマに綱吉政権は直面させられた。江戸民衆の賞讃と同情の的であった赤穂事件は、幕府の取締りを意識して、仇討ちで有名な「曾我物語」「太平記」ものなどを脚色した多くの義士劇が生み出された。赤穂事件は、その後日本人にとって最もなじみ深い仇討ち物語、あるいは主君に仕える武士の精神を「日本精神」として強調する国民的

物語に仕上げられていく (『国策』解題 p. 214/大串)。

徳川幕府崩壊後は、1868 年 11 月明治天皇が泉岳寺に勅使を派遣し、大石らを嘉賞する宣旨を下すなど赤穂浪士顕彰の動きが出てきた。他方で文明開化を謳う明治藩閥政府は仇討ちを前近代的蛮行として赤穂義士に厳しく、赤穂に大石神社 (赤穂大石神社) を創設する認可が出たのは 1900 年であり、神社完成は大正を待たねばならなかった。その後、日清・日露戦争における世界の大国への勝利は、近代日本のナショナリズムのうねりを生み出し、明治大正期の政論家・福本日南『元禄快挙録』(啓成社、1909) では、赤穂義士が手放して礼賛され、四十七士と忠君愛国が同一視されるようになる。日露戦勝以降の帝国主義的思潮の台頭に伴い、武士道は日本精神の独自性・優位性を表現するものとなり、昭和期には軍国主義・国家主義を支える精神的なスローガンへと変移してきたのである。大東亜戦争下に高等文官試験の試験科目「国史」の教科書として文部省が編纂・刊行した『国史概説』1943. 3 では、「赤穂浪士の義挙」を次のように記述している——「(元禄華奢の風に染み、質実剛健なる士道は泰平と安逸との裡に歿し去ったかの觀を呈していた時) ……義雄以下の義士が旧主の恩顧を忘れず、不屈の精神と堅固なる団結とを以て艱苦を凌ぎ、遂に素志を貫徹して報恩の赤誠を披瀝し、しかも事成るや潔く幕府の裁断に身を委ねたことは、我が武士道の精華と称すべく、また忠の大義に通じるものでもあった。されば世の賞讃の声は期せずして義士の上に集まり、同情の眼は翕然としてこれに注がれた」(呉 PASIS 出版、復刻 2017. 2、下巻、p. 91) と。1899 年には、新渡戸稲造による『武士道 (Bushido)』(原文は英語) がアメリカ合衆国で出版された。

このように『忠臣蔵』には、天皇を中心とした中央集権国家における「国民・臣民」概念の萌芽が読み取られ、大石内蔵助は、「忠孝」のキーワードを通して日本の国民を「天皇の臣民」に育てるうえで好都合なキャラクターとして処遇されてきた。しかし、綱吉政権の側用人・柳沢吉保、吉保に仕えた儒学者・荻生徂徠らが主張したとされる名誉の死を賜ること (切腹申しつけ) で保とうとした幕府の法的体面から毀れ落ちたものこそ、むしろ『忠臣蔵』物語の持続的人気を支えるものであった。判官最良、祖先 (主君) 崇拜、怨霊 (御霊) 信仰、集団報復、反逆辛苦の準備過程への共感が入り混じった浪士助命と公的憤懣の浄化・発露の側に身を置くことを可能にする場が、国民的物語としての『忠臣蔵』であった。そして、〈將軍—藩主—家臣〉という近世的序列のもとで「忠孝」のモラルに反した場合の士族への処罰構造は、近代に入って、平民 (四民平等) の最上位に〈天皇〉を抱き、国民的徴兵義務と大逆罪へと姿を変えた。忠君愛国は近代的富国強兵のイデオロギーとなり、武士道という硬直した美德の枠組みのなかに忠臣蔵を押し込めたが、強権に対する隠然たる反発と『忠臣蔵』の庶民的受容と

いう構図に変化がなかったことを、国策紙芝居は描き出しているであろう。紙芝居『忠臣蔵』には、上掲のほか1942年12月から1943年12月にかけて第一画劇社(神戸)から「大詔渙発一周年記念作品 日本精神発揚紙芝居」として刊行された全20篇の同名作品(森山優氏所蔵)が確認されている。

・米沢藩9代藩主・上杉鷹山 寛延4年7月20日(1751年9月9日) - 文政5年3月11日(1822年4月2日)

上記の高等文官試験用教科書『国史概説』は、上杉鷹山についても概説している―「幕府の諸藩に対する統御策は家綱の頃より親和の度を加えたので、諸藩も夫々の藩情・民風に随い、藩政を振肅してその成績を挙げた。(その実例として、会津藩の藩祖保科正之、岡山藩主池田光政、水戸藩主徳川光圀、加賀藩主前田綱紀、熊本藩主細川重賢につづいて、米沢藩主上杉治憲、松江藩主松平治郷をとりあげ)かくの如き諸大名の治績を見るに、多くは困窮せる財政の匡救に尽瘁し、これが方策として斉しく勤儉節約を励行すると共に、殖産興業を図り、領民を賑恤し、また大いに文武を奨励して士風の振作に努め、遍く教化を及ぼして醇風美俗の涵養に力を注いだのである」と。米沢藩の藩政改革は他藩に比してもラディカルであり、日向の小藩からの養子であった鷹山のリーダーシップは、明治期以降の国定教科書「修身」にも、明治天皇、二宮金次郎(尊徳)に次いで多く取り上げられてきた。内村鑑三が日清戦争の始まった年に英文で書いた『代表的日本人』にも、西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の生涯が描かれ、日本の文化・思想を西欧社会に紹介する代表的な著作として知られている。

新田開発・用水整備など全国的大開発の時代・徳川幕藩体制の確立時代を経て、18世紀半ばから19世紀にかけて、諸藩・民衆は商品経済の急速な波に巻き込まれていく。近世日本の労働集約型農業の展開は「勤勉革命」(速水融『歴史のなかの江戸時代』)と呼ばれる生産力発展をもたらし、そのなかで、為政者・民衆ともども勤勉・儉約・謙譲・孝行などの「通俗道徳」を内面化していく(安丸良夫『日本近代化と民衆思想』平凡社、1999.10)。経済社会の進展に見合った生活習慣の確立が必要となり、経済的成功と通俗道徳をパラレルに見据えた石門心学などの教えが浸透していくのである。

上杉鷹山が行った大儉約令、自らの生活費の削減、奥女中的大幅リストラ、殖産興業政策、籍田の礼、世襲代官制度の廃止、備荒20ヵ年計画などは紙芝居作品に描かれたとおりである。しかれば大東亜開戦後間もなく一年を迎える“1942年10月”という時期に紙芝居刊行會からこの種の伝記紙芝居が創作されたのは、鷹山および米沢藩復興の史実への注目であっただろうか。鷹山をモデルとしたこの作品は、本稿でこの後に紹介することになる「社会強化、事業家、名望家(二宮尊徳、大原幽

学、濱口梧陵等)」という主題へつながる作品群の一つともいえる。民を思う名君賢宰のもとでの「富強(富国強兵)」政策と国民的な「勤儉節約」を謳うことが戦時下という時代の空気に同調同期する意味合いを以て発信・受容されたことは否定できない。しかし、近世米沢藩の改革が、明治以来の「富国強兵」・太平洋戦争下の国民に強い「滅私奉公」とは一線を画し、国を豊かにして国民を安心させるという「民富」「富国安民」の統治理念に深く根差したものであったことは、作者の意図にかかわらず、時代を越えて評価されるべきところであろう。

## 2. 社会強化、事業家、名望家：濱口梧陵、大原幽学、二宮尊徳

次に「近世(江戸時代)」の人物として取り上げるのは、享和以降の社会経済の発展に伴う諸課題に取り組んだ民間の指導者として伝えられる人物である。

### (1) 関連作品

●稲むらの火(国語読本巻10)／松永健哉脚色；西正世志繪画、日本教育畫劇、1941.07.25



図5 『稲むらの火』 7景

【あらすじ】安政元年11月5日、紀州有田郡廣村の話。この日、莊屋・浜口五兵衛は海を見ていた。地震はゆっくりと揺れ、唸るような地鳴りが聞こえる。五兵衛は波が沖へ沖へと動いて、砂浜が広がり、黒い岩底が浮き出ているのを見て、驚いた。この日、ちょうど村では豊年を祝う祭りの準備中であつた。五兵衛は何を思ったのか、突った稲束に目をつけ、まるで狂人のように稲束に火を点けて回つたのである。その火を見て、呆然と立ち尽くす五兵衛。そのとき、下の村では「火事だ!」の声とともに、寺の鐘が乱打された。村人が気がついたのだ。村人は庄屋宅に向かって駆け上がり、懸命に消火に励んだ。「うっちゃっておけ!、村中の人に来てもらうんだ」と五兵衛は叫んだ。五兵衛は、村人全員が集まったのを確かめると、海を指さした。海の線は太くなり、広がって岸に向って押し寄せてきた。「津波だ!」。津波は村を一飲みにした。五兵衛の点けた稲むらの火は燃





え盛った。この火によって、村人は津波から逃れることができたのである（『国策』 解題 p. 27／安田）。

●大原幽學／古川良範原作；西正世志繪畫。日本教育畫劇，1943. 11. 25

【あらすじ】江戸時代後期の農政学者・大原幽学（寛政9〔1797〕年-安政5〔1858〕年）の逸話。中和村長部の名主・遠藤良左衛門宅に寄宿した幽学は村人に流行る賭博の自制を唱える。近くで賭場を開く笹川重蔵はそれを快く思わず、子分・矢七をして、村人に210日の嵐対策（苗植付けの早期化）を説く幽学の話妨害させ、「幽学は八州に狙われている」と村人を唆す。村人は幽学に寄り付かなくなるが、幽学は良左衛門を携えて水の未だ冷たい苗床を耕す。210日の嵐は村人の稲の花を吹き飛ばし、名主の稲畑だけが助かる。幽学は名主の家に村人を集め「米の援助、協同組合の設立、収穫金の積立、農作の日当制、共同作業」を提唱する。笹川重蔵は、村人の信頼を取り戻した幽学の刺客として用心棒の平手造酒を差し向けるが、刀を抜かずに対面する幽学の沈着に敵わず逃げ出す。平手を手引きしたとして村人に捕まった矢七を、名主と幽学は「百姓に帰る」よう諭す。組合は「先祖株組合」と名付けられ、村人総出の最初の耕作の日に、更生の一步を踏み出した矢七の姿も見える（『国策』 解題／p. 186 原田）。



図6 『大原幽學』 17 景

●二宮金次郎／堀尾勉脚本；油野誠一繪畫。日本教育畫劇，1941. 10. 25

【あらすじ】二宮金次郎は、天明7年7月23日、神奈川県足柄郡柏山に生まれた。家は柏山を流れる酒匂川の洪水被害で貧乏となり、父・利右衛門は苦勞から病氣を患う。12歳の金次郎は父の代わりに、酒匂川の堤防の修繕作業に加わる。数ヶ月後、修繕工事が終わり、父の病氣も回復する。2年後、再び柏山を洪水が襲い、利右衛門が亡くなる。金次郎は一家の主として母、弟とともに働きながら、勉学に励んだ。金次郎16歳の春、今度は母がこの世を去り、金次郎と2人の弟は各々親類に預けられた。金次郎は前にもまして働き、夜は学問に

励んだ。ある日、萬兵衛おじさんから、夜に行燈の油を使って読書することを叱られた金次郎は、自ら油菜の種を畑にまき、育てる。半年後、育った油菜の実を油に取りかえてもらった金次郎は、夜遅くまで働いた後、自ら得た油で行燈を灯して勉強した。暇を見つけて荒れ地の開墾をはじめ、5年後には、3両2歩を貯めて萬兵衛おじさんから独立。20歳で柏山の実家に戻り、我が家の修繕に励んだ（『国策』 解題 p. 55／松本）。



図7 『二宮金次郎』 12 景

(2) 幕末の事業家・社会強化、事業家、名望家

・濱口梧陵 文政3年6月15日（1820年7月24日）-1885年（明治18年）4月21日

紙芝居『稲むらの火』は、安政元年の安政東海地震、安政南海地震の実話を背景として、濱口梧陵の活躍を描いた物語である。最初に地震が発生したのは、1854（嘉永7）年11月4日（新暦12月23日）午前10時頃一後に安政の東海地震と呼ばれる巨大地震であり、その32時間後の同11月5日（新暦12月24日）午後4時頃に発生した安政南海地震、安政年間に発生した顕著な被害地震も含めて「安政の大地震」とも総称される。この地震は嘉永年間に起きたが、孝明天皇の内裏炎上、天変地異、地震前年のペリー黒船来航を期に安政と改元されたことから、歴史年表上では安政を冠して呼ばれる。

この物語が国内はもとより海外にまでも有名になったのは、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の功績である。1897年に八雲が出版した著書「仏の島の落穂」（Gleanings in Buddha-Fields）のなかの「生ける神」（A Living God）の章で、五兵衛（儀兵衛）の活躍が綴られている。八雲が書いた物語は、それから40年後、梧陵と同郷の小学校教員（後に校長）・中井常蔵の手で書き改められ、1937年『小學國語讀本卷十』（国定第四期、文部省著作）となって全国の小学校に登場した。

舞台は紀州有田郡湯浅廣村（現在の和歌山県有田郡広川町）。モデルは江戸時代の紀州・総州（千葉銚子）で代々手広く醤油製造業を営む濱口家（ヤマサ醤油）七代目当主の濱口儀兵衛（梧陵）。房総東側の利根川沿いは

大豆や小麦の生産地、西を流れる江戸川下流には行徳塩田があり、大消費地の江戸にも通じているなど、醤油造りに有利な条件が揃っていた。地震発生前にも私財で「耐久社」（現県立耐久高校）や共立学舎という学校を創立するなど、後進の育成や社会事業の発展に努めた篤志家である。地震発生当時 34 歳の働き盛り、自らも九死に一生を得た後、直ちに救済、復興対策（橋梁、堤防構築、失業対策等）に奔走する。翌年から 4 年の歳月を費やして全長 600 m、幅 20 m、高さ 5 m の大防波堤「広村堤防」を築いた。その堤防は 1946 年の昭和南海地震のときにも、村の大部分を津波から守った。2004 年末のスマトラ沖地震・津波をきっかけに注目され、紙芝居や人形劇、小学校の副読本などで津波の防災教育に役立てられている。

紙芝居『稲むらの火』は 1941 年刊行であり、『小学国語讀本』の編纂とほぼ同時進行とみられるが、雑誌『教育紙芝居』1 巻 4 号（1938. 12）には「斎藤義七郎（台北）『稲むらの火』」の記事があり、2 巻 1 号（1939. 1）には、「1938 年 11 月 23 日『台日新聞』に『稲むらの火』を支那式に改め『吾作老爺』と改題した作品」が民衆向けに公開されたという記事が紹介されている。このことは上に紹介した〈松永健哉脚色；西正世志繪画、日本教育畫劇〉の原型となるものが出回っていたことをうかがわせるものである。しかし私どもは、これらの作品そのものを発掘するには至っていない。雑誌『教育紙芝居』には早くも 1 巻 1 号（1938. 9）にそのタイトルが見えるし、1938 年当時の国防婦人会、国民精神総動員運動の各地イベントで実演されていたことから、日本教育紙芝居協会の比較的初期に有力作品として扱われていたことを示していよう。

・大原幽学 寛政 9 年 3 月 17 日（1797 年 4 月 13 日）-安政 5 年 3 月 8 日（1858 年 4 月 21 日）

紙芝居『大原幽学』は、浪曲・講談で有名な「天保水滸伝」に登場する博徒・笹川繁蔵、浪人・平手造酒をも配しながら、下総国香取郡長部村（千葉県旭市）を拠点に、農業協同組合の原型である「先祖株組合」を創設した大原幽学の生涯の一時期を描いた作品である。舞台となった 1800 年代前半の下総地域の社会変動について、稗史研究の第一人者・高橋敏は、次のように述べている――「飲み・打つ・買うの放蕩に起因した地域社会の荒廃、村落を構成する家、構成員家族の崩壊は、醤油と干鰯に代表される一大産業の発展によって引き起こされた社会変動の一側面であった」。「銚子の醤油産業は、地元飯沼村の豪農田中玄蕃や紀伊国有田郡濱口儀兵衛らによって紀州湯浅の技術が持ち込まれ……」「干鰯は、摂津・和泉・紀伊の関西漁民の房総への移動にともなって……」「利根川水運や海上交通をとおして、巨大消費都市江戸を支える物産の供給地として発展・膨張していくことが約束されていた」。「産業の拡大につれて他国からの出稼ぎ人が流入してくる。同時に副作用の消費欲も高まり、

奢侈・遊興が流行し、風俗は紊乱して村落の荒廃状況が発生する」（『大原幽学と飯岡助五郎』山川出版社、2011. 1, p. 4-6）と。

江戸中期以降の商品経済の波や、天明期に続いた凶作による生活の困窮から賭博に走る農民の増加現象は、この下総地域に限った現象ではなかったが、武士出身の無宿人・大原幽学が美濃、大和、京、大阪、信州上田など長い放浪を経て、房総で実践道徳を講ずるようになったのは天保 2（1831）年とされる。幽学の根底にあったのは、神道・儒教・仏教を一体とする独自の実践道徳（「性学」といわれる）であり、幽学が領導した協同出資・協同耕作による農村の振興は、日本的な地域に根ざした協同組合運動の源流になっていく。

しかし、幽学の名声・実績の下に農民が団結することを警戒した幕府・関八州の弾圧の対象となり、数年に及ぶ取り調べの末、謹慎百日、教育施設・改心楼の取り壊しを命じられた。幽学に対する訊問は前後 6 年にも及んだうえ押込百日謹の判決があった。すべてに絶望した 62 歳の幽学は、安政 5（1858）年 3 月 8 日未明、長部村の墓地で自刃を遂げる。同時代の農村改革者・二宮尊徳の死の二年後であった。

幽学の農業指導・博徒教化は、幕藩体制の秩序を乱すものとして追訊されたが、昭和 3（1928）年には正五位を追贈されている。明治末から大正期に見られた徳教家・地方改良家としての幽学復興は、日露戦争後の地方改良運動、列強との国際競争激化に備えた国民の精神的統一（1908 年戊辰詔書）に向けられていたであろう。しかし、本作には幽学の失意の自殺は描かれず、武道や信州での農業経験も有する幽学は「村のため皇国日本のために協力する」地域の協同精神の担い手として描かれることになる。幕臣にも登用され晩年まで活躍する江戸期の農政家を描いた紙芝居『二宮尊徳』、『二宮金次郎』とは対照的な作品である。戦時下紙芝居への幽学の登場は、食糧の生産強化に向けた共同事業・農村改革、労働モラルを含む農民の教化運動の先人モデルとして造形することにあつたであろう。

・二宮尊徳 天明 7 年 7 月 23 日（1787 年 9 月 4 日）-安政 3 年 10 月 20 日（1856 年 11 月 17 日）

二宮尊徳には、上で紹介した①『二宮金次郎』堀尾勉脚本；油野誠一繪画、日本教育畫劇、1941. 10. 25 のほかに、②『二宮尊徳：壮年時代服部家再興』／成瀬正勝（構成・脚色）；西正世志繪画、日本教育畫劇、1941. 07、③『二宮金治郎』上・中・下巻／今井よね、松本文恵（共編）；京極佳夕絵、紙芝居刊行会、1941. 12、中巻 1942. 02、下巻 1942. 03、④『二宮尊徳一代記』／大日本報徳社教務部（編）、[大日本報徳社]、[出版年不明]（静岡県立大学図書館浦上史料）の 4 点が確認されている。同一人物で戦時下紙芝居の主人公として 3 点以上の作品に登場するのは、楠木正成と二宮尊徳の二人だけである。作品①は、少年期から青年





期の金次郎を見舞った水害・両親との死別・叔父宅での労苦など、後の「勤労と勉学」「負薪読書」伝説の原点となる物語であった。作品②は、20歳を過ぎて実家再興、土地買戻しの風評が小田原内藩にも届き、家老服部家の財政立て直し（「仕法」といわれる）に取組み、五年計画を4年で成就する壮年期の物語である（『国策』解題 p. 29／安田）。作品③は、宗教紙芝居で出立した紙芝居刊行会の今井よねによる全3部の大作であり、野洲・桜町・日光等の農村改革に携わった70歳の臨終までを丁寧に描いている（非文字2020年購入。解題は第二期成果報告に譲る）。作品④は大日本報徳社の刊行であるが他館所蔵のため詳細は省く。このほか今井よねには、尊徳が唱えた根本的倫理―「至誠・勤労・分度・推譲」を登場人物に託して教え諭す『ある常会』山田勝治画、紙芝居刊行会、1941. 07. 05という作品もある。

国定教科書の登場回数が最も多かった「二宮金次郎」は、明治37（1904）年国定修身教科書で伝記テキストの基軸ともなり、〈勉強しながら労働する子ども〉のイメージを強力に植え付け、大正・昭和の理想的人物調査では、常に上位にランクされた。勤勉や孝行をはじめ、我慢・倹約・公益などの教材として掲げられた金次郎のエピソードは、理想的な人間像の典型的なモデルであった。敗戦に伴う御真影、それを祀っていた奉安殿が除却され、教育勅語の垂れ幕なども取り外されたが、戦後に至るも金次郎の石像が校庭の片隅に残された。戦後の少年雑誌・学習雑誌などにも明治44（1911）年文部省唱歌「柴刈り縄なひ草鞋をつくり／親の手を助（す）け弟（おとと）を世話し／兄弟仲よく孝行つくす／手本は二宮金次郎」が掲載されたりしていた。

修身教科書に金次郎が多く登場した理由は何か。歴史家・奈良本辰也は著書のなかで、明治の哲学者・井上哲次郎が国定教科書のなかに尊徳が入れられたことに、金次郎が農民出身であり、子ども達にとっては身近な存在であったことを紹介している―「其境遇近く、其境涯相似たり。境遇等しきが故に、教師は学びて怠らず、（中略）農家の子女も、亦能く二宮翁の如くなり得べしとの希望を抱かしむるに足る」というものである（『二宮尊

徳 岩波新書の江戸時代』1993. 07. 05、p. 5）。修身教科書に描かれた金次郎のエピソードは、忘れられて久しい日本人の理想的な生き方の指針であった。そのような人物像は、素性こそ明確ではないが武士から農へ入り込んだ大原幽学の理想主義と、農民から武士（1842年御普請役格。水野越前守の召命）へと上昇しながら農から離れることはなかった二宮尊徳の実践主義・経験主義の違いとしても刻みこまれている。幽学の解体志向に比して尊徳の実利を手放さない上昇志向もまた人物像受入の素地となっているだろう。奈良本はまた尊徳の「知足安分」（百姓はあくまで百姓としての分に安んずべきであり彼に政治批判がまったくないこと）こそが権力をもつものの誰にとっても喜ばれることであったと指摘する（同上、p. 5）。

明治以降も明治政府による従4位贈位（明治24年）があり、高弟たちによって1875（明治8）年設立の遠江国報徳社を起源として大日本報徳社が経営されてきた。同会の歴代社長・岡田良一郎（二代目）、良平（三代目・後の文部大臣）、一本喜徳郎（四代目・後の宮内大臣）といった報徳運動の中心人物からも、天皇制政府の背景がうかがえる。修身教科書の調査と分析を進めていたGHQ民間情報教育局新聞課長・D.C. インボーデン少佐は報徳社訪問の折に「金次郎は日本のアブラハム・リンカーンである」と述べたと伝わる。本稿では、報徳思想が戦時下の国民精神総動員運動で果たした役割を述べるに至らないのだが、こうした周辺人物のエピソードには昭和天皇に近い「宮中グループ」との親和性がうかがわれるであろうし、国策紙芝居が決して取り上げなかった急進的「農本主義」の支持層とは異なる戦時下日本社会の基盤を本作品は反映したものといえることができる。

今回取り上げた人物たちが活躍した江戸時代も19世紀中盤となると、国内の諸問題とともに、貿易を求めて列島をうかがうロシア・フランス・アメリカ等の動向が幕藩政権にとって不可避の課題となってきた。次回（後編）ではその問題に直面した諸人物を取り上げる。

以上